vol.56

病院新時代

「ホスピタウン構想」を掲げ 安心ある“まちづくり”に尽力

阪神・淡路大震災で被災した経験から、ケアミックス病院に転換した宮地病院。近年は「ホスピタウン構想」を掲げ、安心ある「まちづくり」の一翼を担っている。

医療法人明倫会 宮地病院（神戸市東灘区）

こども食堂当日、異世代の人々がレクリエーションに参加

神戸市東灘区で、60余年にわたって地域医療に貢献し続けている宮地病院は1995年の阪神・淡路大震災で建物が全壊、一時閉院せざるを得なくなった。その2カ月後に仮設診療所を再開した際、同院の再建を求める地域住民らの励ましの声に後押しされた宮地千尋理事長は、再建に向けて奔走。97年に悲願の新病院開設に至った。「震災を機に、医療だけでは地域の方々を救えないと実感しました」と、宮地理事長は振り返る。

開院当初から急性期医療を担ってきたが、再建にあたって「地域に必要な医療」を模索し、療養病棟を擁したケアミックス病院に転換。その後も回復期リハビリテーション病院や介護老人保健施設、サービス付き高齢者向け住宅（以下、サ高住）などを次々に立ち上げ、後方支援の充足を図った。

近年、同院を中核する明倫ヘルスケアグループでは、医療・介護のシームレス・ケアで培った実績を強みに「ホスピタウン構想」を掲げ、誰もが安心して暮らすことができる〝まちづくり〟に乗り出した。その一環として、同院のロビーにはピアノや絵画、生花などを配し、訪れる人々が「五感で楽しめる」「また来たくなる」ような工夫が施されている。

この構想において、グループ内で重要な役割を担っているのが3年前に開設したサ高住「潮騒の家」だ。同施設では、今年2月から月に1回、こども食堂「けろっと食堂」を開催。ボランティアと職員がサ高住のキッチンを利用してつくった弁当を地域の子どもたちに提供している。当日は館内にレクリエーションコーナーも設置され、子どもたちは職員や入居者らとともにゲームや工作を楽しめる。今後は同施設を異世代交流のコミュニティとして、地域に開放することも視野にあるという。

「今は病院が医療だけを提供する時代ではありません。これからも中小病院の小回りの良さをフルに活かして、新しいことに挑戦し続けていきます」（宮地理事長）

写真＝中野　珠

1

2

3

4

5

6

宮地病院の新たな視点

- ◉地域の高齢化を鑑み、急性期からケアミックス型に転換
- ◉地域社会に寄り添う「ホスピタウン構想」を実践
- ◉こども食堂の運営をつうじて、異世代交流の場を創出

1 在宅での生活が継続できるよう、リハビリにも力を注ぐ　2 院内に併設された重度認知症デイケア「つくし」では、専門スタッフが手厚くサポート　3 こども食堂で配布された「唐揚げ弁当」。この日は、園芸療法で収穫されたパセリも添えられた　4 ピアノが配された病院のロビーでは、コンサートも行われる　5 ロビーや廊下の壁面にはアートギャラリー風に絵画が飾られている　6 宮地千尋理事長

医療法人明倫会**宮地病院**
〒658-0016
神戸市東灘区本山中町4-1-8
TEL：078-451-1221
病床数：88床（一般病床44床※うち地域包括ケア病床8床、療養病床44床）
www.meirinkai.or.jp

(C) 2023 日本医療企画